

京みやこに入いること漸やぐやく近ちかづき、悲情はら撥がたひ難がたくし

て、懐おもひを述のぶる一首いちしゆ 并あはせて一絶

四〇〇六番

かき数かずふ 二上山ふたがみやまに 神かむさびて 立たてるつがの木き 本もとも枝え
も 同おやじ常とき磐はに はしきよし 我わが背せの君きみを 朝あさ去さらず
逢あひて言こと問とひ 夕ゆふされば 手て携たづはりて 射いみづかは 清きよき河か
内うちに 出いで立たちて 我わが立たち見みれば あゆの風かぜ いたくし
吹ふけば 湊みなとには 白しら波な高たかみ 妻つま呼よぶと 渚すどり鳥は騒さわく 葦あし
刈かると 海あま人の小舟をぶねは 入いり江え漕こぐ 梶かぢの音おと高たかし そこをし
も あやにともしみ しのひつつ 遊あそぶ盛さかりを 天すめろ皇ぎの
食をす国くになれば 命みこと持もち 立たち別わかれなば 後おくれたる 君きみは
あれども 玉たま梓ほこの 道みち行ゆく我われは 白しら雲くもの たなびく山やまを
岩いは根ね踏ふみ 越こえ隔へなりなば 恋こひしけく 日けの長ながけむそ そこ
思もへば 心こころし痛いたし ほととぎす 声こゑにあへ貫ぬく 玉たまにも
が 手てに巻まき持もちて 朝あさ夕ゆふに 見みつつ行ゆかむを 置おきて行い
かば惜をし

四〇〇七番

我わが背せ子は 玉たまにもがもな ほととぎす 声こゑにあへ貫ぬき
手てに巻まきて行ゆかむ